

新型コロナウイルスにみえる多様性尊重の重要性

人間福祉学部長 武田 文

2020年度は、新型コロナウイルスの影響で、残念ながらほとんどの授業がオンラインとなってしまい、キャンパスライフも大きく制限され、学生にとっても、また教職員にとってもフラストレーションやストレスがたまる1年であった。こうした事態を招いた新型コロナウイルスは、中国の武漢を中心に感染が確認されてから数か月後にはアマゾンの先住民でも感染者が確認されるなど、いとも簡単に世界中に拡がり、多くの尊い命を奪った。交通機能の発達によって多くの人が簡単に国境を越えられるようになった現代では、残念ながら当然の結果なのかもしれない。

志村けんやアメリカのトランプ前大統領が感染したように、誰でも感染するリスクがあるにも関わらず、残念ながら検査や医療へのアクセスは世界中で平等にあるとは言えない。開発途上国、貧困者、外国人、セックスワーカー、スラムの住人といった周縁化された人たちは、後回しになっている現実がある。社会階層が低い人たちがほど劣悪な環境で健康状態が悪い傾向にあり、抵抗力も弱いいため、新型コロナウイルスの感染の可能性や、重篤化の可能性が高くなっている。アメリカでは、新型コロナウイルスの死者数に関して、ヒスパニックと黒人（アフリカ系）が、白人とアジア系よりも2倍ほど多かったと報告されている。つまり、ウイルスは人を選ばないが、人間が作り出した社会構造や、私たちが持つ偏見や差別によって新型コロナウイルスに関する格差が生み出されているのである。

国連は、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標である、17のゴール・169のターゲットから構成されるSDGs（持続可能な開発目標）を発表し、「地球上の誰一人取り残さない」ことを誓っている。それにもかかわらず、いざ新型コロナウイルスのパンデミックがおこると、どの政府も自国民を守るのに精いっぱい、お互いに国境を封鎖して連携が分断されてしまったり、大国間でいがみ合いが起こったりして、周縁化された人々への支援が後回しになっている現状が続いている。しかし、いまこそ世界中の人々が国境、セクシュアリティ、経済格差などを超えて協力し合い、このパンデミックを乗り越えていく必要があるのではないだろうか。

新型コロナウイルスの今後を予測することは現段階（2020年11月末）では難しいが、2021年度の授業に関しては基本的に対面で実施することが2020年11月下旬に村田学長によって発表された。2021年度は、格差を乗り越え多様性が尊重される社会を実現するために必要な知識や方法に関する教育や研究が、人間福祉学部と人間福祉研究科において、キャンパスにおける対面の形で積極的に行われることを願っている。